

(生活科・理科)

## 自ら考え、いきいきと伝え合う子どもを育てる

### ～生活科・理科の学習を通して～

大阪市立清水小学校 宮本純・宮内千春・川本麗美

#### 1. はじめに

本校では、研究主題を「自ら考え、いきいきと伝え合う子どもを育てる」とし、3年計画で研究を進めてきた。研究を始めるにあたり、本校の子どもの実態について話し合った際、学習活動に意欲をもって取り組む子どもが多いのだが、自分の考えや思いを発言・発信する力、相手とつながる力・コミュニケーション力に課題があるという意見があがった。このような子どもの実態をふまえ、めざす子どもの姿を「自分の考えたことを、言葉・文・図・絵などを使って、書いたり、発表したりし、互いに伝え合い認め合うことで、自分に自信がもてる子どもを育てる」と設定し、研究主題を「自ら考え、いきいきと伝え合う子どもを育てる」とした。

3年計画の1年目にあたる一昨年度は、副主題を「考えたくなる場の設定の工夫」とし、『自ら考え』る活動に重点をおき、指導者に考えさせられるのではなく、子どもが自然と考えたくなるような学習環境づくりに取り組むことにした。

研究2年目にあたる昨年度は、交流活動に重点を置き、取り組みを進めていくことにした。また、研究教科については、観察や実験に意欲的に取り組む子どもが多く、交流活動の活性化が期待できるという理由から、以降の2年間は生活科・理科にしぼって実践を行うことにし、副主題を「生活科・理科の学習を通して」と設定した。研究を通して【体験活動の重視】【少人数グループの活動】【発表ツールや活動ルールの適用】が子どもの交流活動を活性化させるという成果が得られた。一方、『自ら考え』ることにおいては【子どもの意識に寄り添った授業づくり】と、『いきいきと伝え合う』ことにおいては【交流活動を活性化させるツールの工夫】が指導者として求められるという課題も浮き彫りになった。

以上の経過をふまえ、研究3年目の本年度は研究主題・副主題を昨年度と同じくし、研究に取り組むことにした。

#### 2. 研究の視点

##### (1) 研究の重点

研究授業の授業者は子どもが「自ら考えるための手立て」と「いきいきと伝え合うための手立て」の2点を具体的に示す。それを《授業を見る視点》とし、それらの手立てが子どもにとってどれだけ効果的であったかを授業の中の子どもの姿から読み取ることが研究の重点とした。

##### (2) ノート指導の統一

ノートの見開き2ページ分を使い、問題解決の流れ（問題⇒予想⇒実験・結果⇒考察⇒結論・まとめ）を分かりやすくし、その流れを定着させることで自分なりの考えがもちやすくなると考えられる。また、ノートの右端に子どものつぶやきを記入するスペース（つぶやきコーナー）を設けることで、子どもは自分の考えを振り返り、指導者は子どもの意識に寄り添うことができるようになることが期待できる。

### (3) シェアリングボードの活用

交流場面において、一人ひとりの考えを共有できるスペース（シェアリングボード）を活用する。学年の実態や学習内容に合わせた様々なパターンのシェアリングボードの工夫が考えられる。

### (4) 指導案検討会のあり方

昨年度の課題としてあがった、子どもの意識に寄り添った授業づくりを行うため、指導案検討会のあり方を、昨年度までの紙ベースでの検討会から、模擬授業ベースの検討会へと変更する。

## 3. 研究のまとめ

### (1) 研究の成果

#### ①ノート指導の統一

- ・特に3年生において、問題解決学習の流れをつかむのに効果的であった。
- ・つぶやきコーナーで、子どもの授業時間には取り上げられなかった考えや思いが表現されており、授業改善にも役立てることができた。

#### ②シェアリングボードの活用

- ・付箋を使って自分の考えを気楽に表現できるという面で効果的であった。
- ・シェアリングボードを活用することで、友だちの意見を参考にしながら、自分の考えを見直し、深めることができた。
- ・ピラミッドチャート型のシェアリングボードを活用することで、子どもたち自身の話し合い活動を通して自分たちの考えを精選することができた。
- ・シェアリングボードをそのまま学級に掲示することで、新たな交流の手立てとすることができた。

#### ③交流を活性化させるための工夫

- ・子どもの興味を引き出す教材の工夫（ザリガニ・シャボン玉）や課題・問題設定の工夫（2秒の振り子）をすることで、活発な交流を引き出すことができた。
- ・シェアリングボードのような具体物を通した交流をすることで、事実をもとに話し合いを進めることができた。

#### ④模擬授業スタイルの指導案検討会

- ・子どもの思考に寄り添った授業づくりという面で大きな役割を果たした。授業を作る側の学年にとっても、参加する側にとっても、非常に実りのある討議会を行うことができた。

### (2) 今後の課題

#### ①書く活動と伝え合う活動の時間配分

- ・子どもたちの活動から「実験に夢中で自分の考えを書いていない」「交流の時間だが、まだ考えを書いている途中だ」といった実態があった。この課題を克服するために学年の実態に応じて書く活動と伝え合う活動の時間配分を工夫していく必要がある。

#### ②話し合いの焦点化

- ・グループでの話し合いの場面で、何を話し合えばよいのかが捉えられてないことがあった。話し合い活動の場面では視点を明確にするなど、話し合う内容が焦点化されるような工夫が必要である。